

次の世代（子どもたち）に仏事をつなぐ

川辺町第16組養瑞寺 水野純明

岐阜県には1972年に発刊された「コボたち」という児童文学誌があります。この冊子に子どもたちの詩を載せようと募集を始めたのが、「コボたち 詩コンクール」で、昨年で第44回を数えます。その入賞作品が新聞に掲載されますが、一昨年の新聞に、岐阜市内の小学校2年生の児童の詩が掲載されていました。紹介します。

おそうしき

おじいちゃんのおとうさんの

おそうしきにいったよ

はじめてあったのに

もうぜんぜんうごかなかったよ

おしょうさんがきて

おきょうをよんだよ

とつてもながくて

もういやだとおもったよ

しろいはこがきて

ぼくたちがはなをいれたよ

そしたら

ふたをしめちゃったよ

くろいくるまでとおくにいったよ

そこでさいごのおわかれだったよ

おじいちゃんが あかいボタンを

おして シャッターがしまったよ

ごはんをたべてまってるよばれたよ

いってみると、もうほねだけで

おじいちゃんにみえなかつたよ

こわかったよ

ぼくは

おじいさんになりたくないな

もちろん葬儀の体験は決して楽しいものではありません。むしろつらく悲しい、心痛むものでしょう。しかし、この子は幼いながらも”死”や”生きる”と向き合い、「死と共にあるいのち」をその体験（葬儀という仏事）をとおして心に刻み込んでいます。

ご法事等におじゃますると子どもたちをその場に連れてこられなかったり、小さい子どもたちであるがまんができないからと別室で遊ばせたりされる姿にあうことがあります。せっかくの場なのにそれこそもったいないなあと思います。

感性豊かな子どもたちは、その場に自分の身を置くだけでも、何かを感じて何かを得ていきます。

少子高齢化・核家族化がますます進み、信仰を子や孫に伝えていくことが難しくなっています。だからこそ、家庭の仏事を子どもと一緒にみんなでナンマンダブツと手を合わせる機会として大切にしてほしいと思います。そして、私たちにはその大切さをご門徒の方々に丁寧に伝えていくだけでなく、お寺が、子どもたちにとっての“居場所”の一つになるような具体的なとりくみも、“次の世代につなぐ”ために求められていると感じています。

<898文字>